KEIO SFC REVIEW

No. 78
Autumn 2024

特集

海外研修の今

新連載…新任教員プロフィール

連載……わたしの推薦図書 ── 堀口 崇

KEIO SFC REVIEW

TABLE OF CONTENTS

No.78

特集

02 海外研修の今

04 マレー・インドネシア語 インドネシア研修
取材 大野 弘幹（総合政策学部2年）……＋寄稿 野中 葉（総合政策学部准教授）

08 アラビア語 ヨルダン研修 モロッコ研修
寄稿 吉松 野乃子（総合政策学部2年）…＋寄稿 山本 薫（総合政策学部准教授）

12 スペイン語 スペイン研修
取材 内田 航貴（環境情報学部2年）……＋寄稿 藤田 護（環境情報学部専任講師）

16 朝鮮語 韓国研修
取材 大川 有彩（総合政策学部2年）……＋寄稿 髙木 丈也（総合政策学部専任講師）

20 ドイツ語 ドイツ研修
寄稿 松本 こころ（総合政策学部3年）…＋寄稿 藁谷 郁美（総合政策学部教授）

24 フランス語 フランス研修
取材 渡辺 美桜（総合政策学部2年）……＋寄稿 西川 葉澄（総合政策学部専任講師）

28 中国語 台湾研修
取材 小野 響（環境情報学部4年）……＋寄稿 宮本 大輔（総合政策学部准教授）

32 寄稿 SFCで学びを深める4言語
英語……中浜 優子（環境情報学部教授）
日本語……杉原 由美（総合政策学部准教授）
イタリア語 …三森 のぞみ（総合政策学部非常勤講師）
ロシア語 ……田中 孝史（総合政策学部非常勤講師）

34 「国際看護実践II」 韓国研修
取材 福留 光琉（看護医療学部4年）……＋寄稿 小池 智子（看護医療学部准教授）

連載

38 寄稿 わたしの推薦図書 No.14
堀口 崇（看護医療学部教授）

40 新連載 新任教員プロフィール

46 七夕祭・未来構想キャンプ取材記

48 編集後記

特集

海外研修の今

ＳＦＣには、春季、夏季の長期休みの間に実施される海外研修プログラムがあります。

ＳＦＣを飛び出して、世界中に学びに行った学生たち。みんなは何を見てどんなことを経験してきたのだろう。

海外研修に参加した学生へのインタビューと体験記をまとめました。

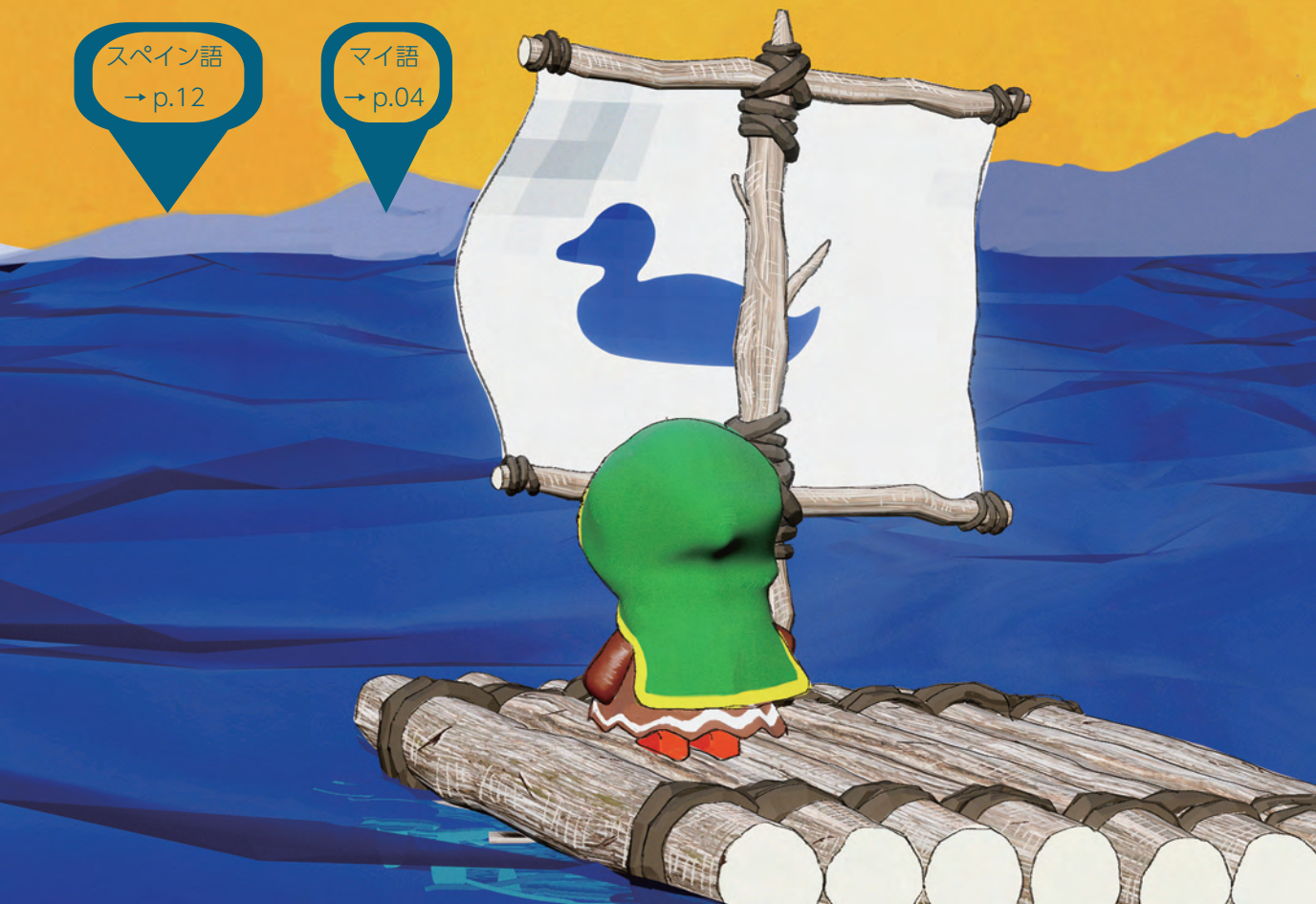
英語、日本語、イタリア語、ロシア語 → p.32

アラビア語 → p.08

ドイツ語 → p.20

スペイン語 → p.12

マイ語 → p.04



ＳＦＣの海外研修プログラムについて

ＳＦＣには、春季、夏季の休校期間に実施される海外研修プログラムがあります。総合政策学部、環境情報学部では、授業期間の言語の学習の延長として、「海外研修Ａ」（４単位）、「海外研修Ｂ」（２単位）という科目が設置され、現在７つの言語の研究室によってそれぞれの研修が開講されています。研修に参加できる条件は言語によって異なりますが、多くの場合、一定の期間、言語の授業を履修すると海外研修に参加することができます。

看護医療学部では、海外での看護医療に関わる研修が行われています。現在は、アメリカでの「臨床看護実践（海外）」、イギリスでの「世界の医療・保健制度 II（海外研修）」、ラオスでの「プライマリーヘルスケアと国際保健 II（海外研修）」、カナダでの「看護医療の英語 II」、韓国での「国際看護実践 II」の５科目が開講されています。

総合政策学部、環境情報学部の外国語海外研修には毎年１００～１５０人、看護医療学部の海外研修には毎年５０～６０人の学生が参加しています。

詳細は、ＳＦＣのウェブサイトでの紹介を参照。
https://www.sfc.keio.ac.jp/about_sfc/international/study_abroad.html

Bahasa Indonesia

マレー・インドネシア語

インドネシア研修

大野 弘幹

一年生の春から一年間、「インテンシブ1」と「インテンシブ2」でマレー・インドネシア語（SFCではマイ語と呼ぶ）を学び、その後の春休みに「海外研修A」に参加した大野弘幹さん（総合政策学部二年）にお話を伺った。

●初めての東南アジア

――海外研修に参加するにあたって不安だったことはありますか。

東南アジアに行くのが初めてだったので、不安はたくさんありました。水道水を飲んだらすぐお腹が痛くなるというわさも聞いていました。また、僕は虫が苦手なので、虫が多いことが一番不安だったかもしれません。

――そのような事前に得ていた情報は、どこで聞きましたか。

マレー・インドネシア語を教えているアリ先生（総合政策学部訪問講師）のご自宅で、以前海外研修に参加した経験のある方からお話を聞く会がありました。その会に僕も参加して、インドネシアでの様子について、様々な情報を聞きました。

●充実したサラティガでの二週間

――インドネシア研修でのスケジュールを教えてください。

サラティガという都市に二週間弱滞在しました。平日は朝の九時ごろに留学先の学校（大学内のランゲージトレーニングセンター）に行きます。午後三時ごろまでは、インドネシア語の授業を受けたり現地の人と遊んだりして、学校にいました。放課後は、周りの街を散策したり、カフェに行ったりしました。その後、ホームステイ先の家に帰って一日が終わります。

――授業について詳しく教えてください。

授業は一コマ百分です。九時から一コマ目の授業が始まって、コーヒーブレイクを挟んで、二コマ目を受けて、昼ご飯を食べて、最後の三コマ目を受けて終わり、という感じです。授業の内容としては、インドネシア語の単語を学んだり、会話をしたり、現地の学生にインタビューをしたりします。街に出て、指定された物をインドネシア語を使って買いに行くというアクティビティもありました。また、文化体験の機会もあり

ました。例えば、バティックという衣服を染めるためのインドネシアの技法を使い、特殊な衣服を作りました。ちなみに、先生一人につき学生五人のクラスで、学生は全員SFCの学生でした。

——どのようなホームステイ先でしたか。

僕のホームステイ先は、ご夫妻お二人で住んでいたお宅です。SFCから研修に参加した五人は、三つのホームステイ先に分かれて泊まりました。二人のグループが二つと、一人のグループが一つで、僕は二人のグループでした。僕のホームステイ先は一つずつの部屋がかなり広くて、家そのものもとても大きかったです。

——家の中や街では何語で会話していましたか。

基本的にはインドネシア語で話しました。現地の人は英語を話さない人が多かったので、インドネシア語しか通じませんでした。

——放課後の過ごし方について詳しく教えてください。

放課後は先ほど言ったようにカフェに行ったり、スパマッサージに行ったりしました。それから、一緒に研修に参加したSFCの学生のうちの一人のホームステイ先が大家族で、そのお宅に行って、ご飯をご馳走してもらったりしました。

——街はどのような雰囲気でしたか。

治安は、特に荒れている感じはしませんでした。ただ、夜は複数人で行動した方が良いという話は聞きました。交通面では、基本的に信号がなくて、手を挙げて歩いていました。道にはバイクばかり

通っていて、車はほとんど走っていませんでした。タクシーも、車ではなくバイクなんですよ。バイクの後ろに乗せてもらい、徒歩三十分の通学路をタクシーで通学することもありました。とても安く、徒歩三十分の距離を百二十円くらいで乗せてもらえます。

――週末はどのように過ごしましたか。

週末には、英語ができる現地の大学生の引率でジョグジャカルタという都市に行きました。遠足では、マリオボロ通りやサマンタリという宮殿、ボロブドゥール寺院などの観光名所を回ったり、ヴィラに泊まってビリヤードをしたり、プールで泳いだりしました。

――衣食住の中でカルチャーショックはありましたか。

「食」でいうと、インドネシアの食事は極端に甘いものか極端に辛いものかだったので、個人的に得意な食事はあまりなかったかもしれません。それから、日本はみんなで食事をする文化がありますが、インドネシアでは一緒にご飯を食べるということはあまり意識されていないようでした。一番衝撃を受けたのはやはり「住」で、特にトイレやお風呂、シャワーなどの水回りは、日本とは全然違いました。僕たちの家のシャワーはお湯が出ましたが、ホームステイ先によってはお湯が出ないところもあったらしく、そういうお宅では冷水を浴びていたようです。

また、インドネシアは朝から夜まで暑いですし、雨がいきなり降り始めたりもするので、気候は僕にとって結構きつかったですね。もう一つ、「住」で衝撃だったことは、アザーンです。アザーンとはイスラームの礼拝時間を知らせる呼びかけで、毎日五回、爆音で街中に流れるんです。朝五時にも流れるので、朝はアザーンに起こされることも多かったです。でも、数日経ったら、すぐに慣れました。

また、物価が安かったのが印象的でした。大きい水一本が、三十八円で、基本的に物価が日本の四分の一くらいの感覚ですね。

●行って良かった海外研修

――普段のＳＦＣでのマレー・インドネシア語の学習と、海外研修での授業や学習との違いについて教えてください。

インドネシアでは、日本語を介さずにジェスチャーで単語を覚えたりしたので、体で身に付けていくという感覚がありました。反復練習ができたのも良かったです。

ＳＦＣで習うマレー・インドネシア語は現地でもだいぶ通用しました。フランクな表現が分からないことは少しありましたが、重要な単語はきちんとＳＦＣで教えてくれているので、困ることはあまりありませんでした。

――海外研修に行く前と比べて見方や感覚は変わりましたか。

本当に感覚が変わりますね。食事や衛生面でも、許容できる基準が下がった気がします。逆に、日本の良さを今までよりも強く実感した部分もあるのかもしれません。虫がたくさんいたので、虫には慣れました。虫といえば、一緒に行った五人のうち二人が、デング熱にかかってしまいましたが……。

それでも、楽しいことをたくさ

ん体験できて、僕は本当に行って良かったなと思っています。僕は、現地の人のフレンドリーで優しいところが結構好きで、また行きたいなと思う要因の一つです。一緒に参加したＳＦＣの学生たちとも、研修を通して仲良くなれました。このインタビューを読んで海外研修に興味を持った方には、ぜひ行ってもらいたいですね。

（構成：井庭晴香）

大野 弘幹
（おおの・ひろき）

総合政策学部２年
野中葉研究会（ムスリム共生プロジェクト）に所属

寄稿 マレー・インドネシア語研究室 野中葉先生（総合政策学部准教授）より

マイ語の海外研修は４単位の「海外研修Ａ」と２単位の「海外研修Ｂ」があり、どちらも春・夏休みにサラティガのサティア・ワチャナ大学で実施する２週間のプログラムです。「海外研修Ｂ」は、マイ語「インテンシブ１」または「ベーシック１」を受講していれば誰でも参加できるのに対し、「海外研修Ａ」は「インテンシブ２」を履修し終えた学生に履修資格があります。期間中は、現地の家庭にホームステイをしながら大学に通います。教室での授業以外に、町でフィールドワークをしたり、小学校やモスクを訪れて交流したり、文化体験をする時間もあり、人々の日常に触れ、インドネシア語を実際に使いながら学ぶことができ、語学力は２週間で驚くほど向上します。これをきっかけにインドネシアの社会や文化の卒業研究につなげたり、慶應の交換留学やインドネシア政府の奨学金を得て、１年間の長期留学に行く学生も見られ、ＳＦＣでの継続的な学びの重要なワンステップになっていると感じています。

アラビア語

ヨルダン研修 モロッコ研修

吉松 野乃子

これまでに二度アラビア語の海外研修に参加した、本誌編集員の吉松野乃子（総合政策学部二年）による体験記。

私は二〇二三年九月のヨルダン研修、二〇二四年二月のモロッコ研修に参加しました。アラビア語の学習を始めた時には、二度も研修に参加するほど、強い意欲があったわけではありません。しかし、長期休暇中の海外研修に参加したことで理解度や関心度が上がり、帰国後はアラビア語の学習に精を出すようになりました。ヨルダン研修に参加することにしたのは、「自分一人で行くのはハードルが高そうだから、クラスのみんなと一緒の今がチャンスだ」と思ったからです。この研修は、私の大学生活で、大きな転換点になりました。帰国後には、ヨルダンでの経験を話題にできるようになりましたし、アラブという新たな世界を自分の中に持てるようにもなりました。また、仲間たちと、海外研修の三週間を共にしたことも、良い経験になりました。アラブに、そして海外研修に魅了された私は、帰国から半年後に、次はモロッコを訪れることになります。

どちらの研修でも、基本的に平日の午前中にアラビア語の授業がありました。現地の先生が英語でアラビア語を教えてくれます。四人程度のSFCの学生で一クラスを作ってもらえます。大学での普段の授業と比べると少人数のクラスですから、手厚いフォローがあり、自分の理解度に合わせて勉強を進めることができました。

午後は、現地で日本語を学習している方々と交流しました。皆さんの日本語が上手で、私のアラビア語とは比べ物にならず、とても驚きました。ヨルダン、モロッコの同年代の人たちに街を案内してもらったり、アラビア語を教えてもらったりしたことは、普通の旅行ではできない経験でした。

直近のモロッコ研修では、ホームステイをしました。私はホームステイをすること自体が初めてで、とても緊張しましたし、最初の頃は言葉が全く伝わらず苦戦しました。モロッコの人たちはアラビア語とフランス語の二言語を使いますが、英語はほとんど話さない方が多いようです。携帯電話の翻訳機能にはとても助けられました。ホームステイ受け入れの条件として、英語での会話ができるということがあったようですが、私のホストファミリーの場合だと、三十代の女性お一人は英語を話しましたが、その方とは四日に一度顔を合わせるくらいでした。アラビア語の上達のためには、それがかえって良かったかも

しれません。

ホームステイ生活では、毎日が予想外の連続でした。私が渡航前に知らされたホストファミリーの情報は、英語が話せる彼女とその両親の三人がいるということでした。しかし、実際に行ってみると、家には叔母さん、義理の妹、その娘の四歳の少女など多くの人が住んでいましたし、住んでいるのか住んでいないのか分からない人も多く出入りしていました。そのうちの一人は、モロッコ研修に一緒に参加したＳＦＣの友達のホストファミリーで、ホストファミリー同士が親戚だったことが研修の最終日に判明しました。また、夕食の時間が夜十時過ぎのことがあったり、四歳の子どもが食事中に食べ物で遊んでいても、大人は叱らないどころか一緒に遊んでいたりしたことには衝撃を受けました。他にも、家のシャワーが冷たくて浴びられなかったことや、朝食がいつもホブズ（アラブのパン）と砂糖たっぷりのミントティーだったことなど、カルチャーショックは挙げ出したらキリがありません。

モロッコで驚いたことは数多くありましたが、嬉しかったこともたくさんあります。その一つは、人見知りの四歳の女の子と、私の部屋

で一緒に遊ぶほど仲良くなれたことです。また、研修中に私が誕生日を迎えたため、研修参加者や、モロッコの日本語学習者が、ケーキやプレゼントを買ってお祝いしてくれたことも、忘れられない思い出の一つです。その日は、ホストファミリーもケーキを準備してくれていたため、人生で最もたくさんのケーキを食べる日になりました。

シャワーを浴びるのは週に一回でした。こういうことは、モロッコに行く前には思いも寄らないことでした。しかし、一度経験すれば「なんとかなるんだな」と思えるようになります。モロッコの文化圏ではそれが当たり前の生活で、私もだんだんと適応することができました。日本とは違う他の文化圏で暮らすことで、生活の許容度が広がったと感じます。普段の生活が変化しても「大体のことはなんとかなる」とドンと構え、「こうしなきゃいけない」という枠の外に出て変化を楽しむことができるようになりました。

一方、ヨルダン研修では寮生活でした。朝と夜の二食を参加者全員と共にすることで、仲が深まったように思います。ヨルダンとモロッコのそれぞれに実際に行ってみると、文化が大きく異なることが分かりました。モロッコに行って最初に受けた衝撃は、ヒジャブを着ていない女性が多いということです。ヨルダンを訪れたのはその半年前ですが、ほとんどの女性がヒジャブなどで顔を覆っていましたから、二つの国をアラブとひとくくりにすることはできないのだと実感しました。ヨルダンでは私たち東アジア人は目立ちますが、交通量が多く信号がない道路を一緒に手を繋いで渡ってくれたり、写真を撮ろうと道端で声を掛けてくれたりするなど、私たちを好意的に受け入れてくれたことが印象に残っています。

ヨルダンとモロッコでは、使われるアラビア語も違いました。ヨルダンで通じた言葉が、モロッコではなかなか通じなかったこともあります。複数の箇所で海外研修に参加したから分かったことです。

それから、ヨルダンはパレスチナ系の人が国民の七割を占めています。私のアラビア語の先生もパレスチナにルーツがありました。ヨルダンでの生活は、パレスチナ・イスラエル問題を自分ごととして考えるきっかけになりました。

二つの研修に参加した後、私は、もっとモロッコと関わりたいと思い、今はフランス語も履修しています。フランス語とアラビア語は単語や文法に共通する点があります。アラビア語を既に学習していたからこその発見です。いつか、今度はフランス語の海外研修で、再びモロッコを訪れることが私の目標です。

この先、マレー・インドネシア語も履修したいと考えています。イスラーム圏で共通の挨拶「アッサラーム・アライクム」はインドネシアでも使えるそうです。アラビア語はイスラームと密接に関わっている言語ですが、マレー・インドネシア語ではどうなるのだろう、と気になっています。

複数言語の学習を通じて、各言語の相違点や類似点を発見することは想像以上に面白かったですし、言語圏ごとの考え方、文化を知ることもできました。「言語は視野を広げる窓」と言われますが、本当にその通りだと思いますし、ＳＦＣには窓を開けられる環境が整っています。（二〇二四年八月記）

寄稿 アラビア語研究室

山本薫先生（総合政策学部准教授）より

アラビア語は西アジアから北アフリカにかけての二十数か国の公用語であり、国連の六つの公用語の一つにも選ばれている世界的な言語です。しかし日本ではいまだにマイナーな扱いであり、アラブ世界の社会や文化に対する理解は不十分なだけでなく、誤った偏見も根強く広がっています。ＳＦＣアラビア語ではネイティブの教員や学生との交流や文化体験に日頃から力を入れていますが、国内ではそうした機会は極めて限られています。しかもアラブ世界は広大で、国や地方によって食べるものや着るもの、日常会話もまったく異なります。そうした多様性を肌で感じてもらうために、アラビア語海外研修では北アフリカの西端に位置するモロッコと、中東のど真ん中に位置するヨルダンの二か所で研修を行っています。実際に両方を体験した学生は、同じアラブといっても歴史背景や風土、またそれを踏まえて発展してきた生活文化に大きな違いがあることを体感し、奥深いアラブの世界により一層関心を持ってくれると期待しています。

吉松 野乃子
（よしまつ・ののこ）

総合政策学部２年

Español スペイン語 スペイン研修

内田 航貴

スペイン語の海外研修で、ホームステイをしながら語学学校に通った内田航貴さん（環境情報学部二年）。ホストファーザーとの暮らしも交えて、サン・セバスティアンでの貴重な経験のお話を伺った。

●海外研修のきっかけ

――スペイン語の海外研修に行こうと思ったきっかけを教えてください。

大学入学後にスペイン語を学び始め、一年生の時に「インテンシブ2」まで履修した後、四週間の海外研修に参加しました。研修先は、スペインのバスク地方にあるサン・セバスティアン（バスク名はドノスティア）です。バスクは特殊な歴史や民族、言語を持つ地域です。研修の前後には、マドリードとトレド、パリにも旅行をしました。

スペイン語を履修したきっかけはいくつかあります。スペイン語が話されている国は多く、グローバルで実用的な言語です。また、文法が英語と似ていたり、音が日本語と似ていたり、学びやすい言語です。サッカーやスペイン文学などに興味があったこともその一つです。

海外研修へ行こうと決めた大きなきっかけになったのは、サッカーです。サン・セバスティアンには、久保建英選手が所属しているレアル・ソシエダというサッカーチームがあり、チャンピオンズリーグでパリ・サンジェルマンと試合をすることが決まっていました。その試合が、ちょうどスペイン語の海外研修と重なっていたんです。これはもう行くしかないと思い、スペイン語研究室の藤田護先生（環境情報学部専任講師）に相談したところ、「勢いっていうのは案外大事だよ」と言っていただき、研修に参加することにしました。

●バスク語も学ぶ海外研修

――平日はどのように過ごしましたか。

朝八時ごろに起きて、ホームステイ先で朝食を食べてから学校に向かいます。午前中に二つスペイン語の授業があり、午後に文化かバスク語の授業があります。お昼は、語学学校の友人と食べに行くことが多かったです。授業の後は、友達とカフェに行ったり、ビーチ

でサッカーをしたりしていました。夜はホームステイ先でご飯を食べたり、遊びに行ったりしました。

――語学学校での授業はどのようなものなのでしょうか。

この研修プログラムで面白かったのは、スペイン語や文化の他に、一週間に三、四回、バスク語も学んだことです。バスク語には複雑な歴史的背景があります（注1）。また、現地の公教育でも使われていたり、生活に浸透していたり、現地に行って初めて知ることが多く、衝撃を受けました。

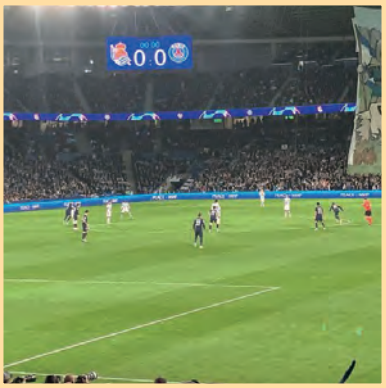
クラスには、出身も年齢も様々な方がいました。そこで仲良くなった四十歳前後のドイツ人の女性は、旦那さんと一緒にサン・セバスティアンに来ていたようです。ホストファーザーの家に招待したり、逆にバーに誘ってもらったりしました。研修が終わって日本へ帰国した後も、連絡を取り合っています。

週末は、近くの都市に旅行に行きました。午後の授業がない日には、一時間ほどかけてフレンチバスク地方まで足を延ばしたこともあります。国境を越えるとスペイン語は通じませんが、バスク語が通じます。バスクの人々は独自の言語を誇りに思っていて、ホストファーザーに教えてもらったバスク語の歌を歌うと、現地の方々はものすごく喜んでくれて、仲良くなれました。

●サン・セバスティアンでの食事

――研修中の食事の様子について教えてください。

新鮮だったのは、ホストファーザーの友人が毎日のように家に来るなど、みんなで夕食を食べる慣習があることです。ソシエダットという、地域のコミュニティとしての美食クラブみたいなものがあ



ります。近所の人が集まって、みんなでご飯を作って食べるのです。ホストファーザーがソシエダットの一員だったので、そのお友達とバスク地方の料理や地域の最高級の食材を食べたりしましたね。バスクは食文化が豊かです。ソシエダットには、地域のスポーツや音楽などの文化的な一面もあります。

授業の合間の昼食は、語学学校の友達とバーに行き、二、三ユーロのピンチョス（注2）や飲み物を楽しみました。お金をかけずに美味しい食事を楽しめるところはサン・セバスティアンの食文化の良いところです。

気に入った食べ物は、バスクチーズケーキです。日本でも見かけますが、元祖のお店はサン・セバスティアンの旧市街にあります。そこのチーズケーキはボリュームがあり、赤ワインと相性も抜群です。それに、スペインはコーヒーが美味しいですね。

Café con lecheというカフェラテのようなものが三百円程度で、毎日のように飲んでいました。ウディ・アレン監督の『サン・セバスチャンへ、ようこそ』という映画にも登場する「カフェボタニカ」というお店のものが、僕にとっては世界一おいしいコーヒーです。この映画はサン・セバスティアンで撮影されたので、語学学校の先生に撮影場所を聞き、「聖地巡礼」もしました。

――サン・セバスティアンの好きなところはどこですか。

パリの影響を受けた綺麗な街並みが好きです。ホームステイ先から一分で行けるビーチも気に入りました。毎日そこに行き、サッカーをしたり、ホストファーザーとランニングをしたりしました。シャビ・アロンソなどの世界的なサッカー選手が育ったビーチで自分もサッカーするという体験ができて、とても感慨深かったです。

近くにビルバオという大きい街がありますが、実はそちらのサッカーチームの方が人気なんですね。その理由は、サン・セバスティアンにはサッカー以外にも、ビーチや美味しいコーヒー、ご飯に映画の撮影地など、エンターテイメントがあり過ぎることなのかなと僕は思っています。

――印象的だったことはなんでしょうか。

信仰を持っている人が身近にいたことですね。研修の最初の週にホストファミリーにカテドラルに連れて行ってもらいました。そうしたら、ホストファーザーが信者の方々の前に出てきて、亡くなった地域の大司教を偲ぶ式典の司会を務め、ミサでは三百人もの人の前で歌ったりしていました。その時までホストファーザーの職業を知らなかったので、びっくりしました。カテドラルの施錠に付いて行ったこともあります。

ホストファーザーはとても思いやりのある方で、バスク流の挨拶や食事など、文化的なことをたくさん体験させてくれました。とても恵まれていたと思います。

また、バスクの人々は、人間関係によって人生を豊かにすることができると思っていると感じました。世代が離れていても、お互いにとてもフレンドリーに接しています。そのような人たちと一緒の時間を過ごせて、僕も人間関係の幅が広がった気がしています。

（構成：堀江真咲）

注1　一九三六～三九年のスペイン内戦とその後のフランコ独裁の下で長年にわたりバスク語の使用が禁止されていたが、現在では積極的にバスク語の公教育が行われているという背景がある。

注2　ピンチョス：スペイン語で爪楊枝や串を指す言葉。ここでは、パンやオリーブなど複数の食材が串に刺さっているような手軽な料理を指す。

内田 航貴
（うちだ・かずたか）

環境情報学部２年

寄稿 スペイン語研究室

藤田護先生（環境情報学部専任講師）より

慶應ＳＦＣのスペイン語科目では、スペイン語圏がラテンアメリカとスペインに広がっていること、そしてＳＦＣが位置する神奈川県にもラテンアメリカのルーツをもった家族が多く住んでいることを重視しています。スペインのバスク地域への海外研修に加え、同じスペインでは歴史のある大学の街でありスペイン語教育の中心地でもあるサラマンカ市でも海外研修を実施しています。夏休みには南アメリカのアンデス高地の国であるエクアドルのキトでの海外研修を実施し、学生たちは同国が抱える移民問題や先住民社会の豊かさ、農業の新しい取り組みなどについて実践的に学びながらスペイン語の語学的能力も高めています。また、毎年２月には特別研究プロジェクト科目も実施しており、ここでは神奈川県を中心とする首都圏の（特にペルーやアルゼンチンとつながる）日系人社会とその歴史や文化、そして子どもたちへの継承言語（ヘリテージ・ランゲージ）としてのスペイン語教育の取り組みに協力しています。

안녕하세요 朝鮮語 韓国研修

大川 有彩

駅や空港など、英語や中国語に並んで日本で目にする機会の多い朝鮮語。身近なようで意外と遠い韓国で海外研修に参加した大川有彩さん（総合政策学部二年）にお話を伺った。

●海外研修前

――海外研修に行く前の、朝鮮語の履修状況について教えてください。

一年生の春学期に「インテンシブ1」の授業を、同じ年の秋学期に「インテンシブ2」の授業を取り、その続きとして春休み中の研修に参加しました。

――朝鮮語を選択したきっかけはなんですか。

私はSFCの高等部出身で、高校時代に朝鮮語を第二外国語として学習していました。高校の卒業時に書く論文でも、韓国への興味から韓国文学を扱いました。その頃からSFCの朝鮮語研究室のお話を伺っていて、入学前から興味を持っていました。

――研修に行く前に、何か不安な点はありましたか。

韓国へ渡航した経験はありましたが、海外に長期間滞在した経験はなかったため不安がありました。何かしらカルチャーショックがあるかもしれない、という思いもありましたね。

●海外研修中

――研修先と研修期間について教えてください。

韓国のソウル市にあるソウル大学で、三週間の研修に参加しました。

――研修先ではどのように過ごしましたか。

大学内の寮で生活をしていたのですが、送迎バスで毎朝登校していました。というのも、キャンパスが本当に広くて、徒歩での移動が難しかったからです。

大学が森に囲まれていたり、大学から最寄り駅までバスを使う必要があったり、その最寄り駅にはチェーン店が多かったりして、SFCや湘南台に似た雰囲気を感じる部分が多くありました。一度も

行ったことがない場所のはずなのに、謎の安心感がありました。

授業自体は、SFCのインテンシブのものとは少し異なり、文法や単語ではなく会話が中心でした。SFCのスキルの授業に似ているかもしれません。授業のレベルの高さに困ることはあまりなく、楽しく学ぶことができました。

朝八時から午後一時まで授業があり、お昼を食べた後の午後は基本的に自由でした。時々、午後に伝統文化を学べる体験授業がありました。一番印象的だったのは、サムルノリと呼ばれる、弦楽器と太鼓と掛け声を混ぜて行う演奏です。日本の盆踊りのような雰囲気で、とても楽しかったです。

休日や午後の自由時間を使って、大学の外にもよく行きました。朝鮮語の海外研修では、メインテーマを一つ決めてフィールドワークをしてください、という課題が事前に与えられています。私は食文化をテーマに選んでいたので、広蔵市場（クァンジャンシジャン）や南大門市場（ナンデムンシジャン）など韓国の大きな市場にたくさん連れて行ってもらいました。市場ごとに雰囲気や食事の種類が大きく異なっていたのが印象的です。

――現地の方との交流はどうでしたか。

ソウル大学には「トウミ制度」というものがあります。SFCの学生四、五人につき一人、韓国の学生さんが付いて一緒に交流してくれるというシステムです。市場ではその方に、現地ならではのお店を紹介してもらいましたね。

日本に関心のある方々ばかりだったので、分からない単語は日本語で話すこともありました。海外研修の後も交流が続いていて、今はその方々が日本に留学されているので、こちらで会ったりもしています。

――海外研修中、特に驚いたことや印象的だったことはありますか。

私が研修に行ったのは冬で、本来なら韓国は日本よりも緯度が高くて寒いはずでした。それなのに、寮の中は暖房をつけなくても寒くありませんでした。オンドルという床暖房が常に効いているので、部屋の中では半袖で過ごせたくらいです。ただ、やはり外は寒くて雪も多く、大雪の日には寮から学校までのバスが出ないこともありました。

食文化では、韓国料理店に行った時の前菜の多さが印象に残っています。一つ定食を頼んだら、その倍の量、キムチやサンチュが無料でサービスされました。他にも、市場巡りをしていて見つけた美味しかった料理やお店のことはよく覚えています。ソウル大学の特別授業でもプルコギやチヂミを作る機会があったので、日本に帰ってからも自分で作ったりしています。

あとは、韓国特有のパリパリ（빨리빨리）文化、みんな急いでいるような文化を強く感じたことがあります。韓国のサブウェイに行った時、お店がすごく混んでいて、お客さんが並んでいたんですね。店員さんも調理をしている人も焦っている様子でしたし、パンの種類や野菜の量を朝鮮語で正確に伝えるのが難しかったです。結局、私が注文したものとは違う飲み物が出てきてしまいました。注文に限った話でもなく、例えばバスの運転や停車や発車についても速度重視でした。早く到着するのは助かりますが、少し驚きました。

●海外研修後

――海外研修から日本に帰国して、見方や考え方が変わったことはありましたか。

韓国での海外研修を終えた後、非常に刺激的でとても楽しかったという感想が一番にありました。その影響で、より韓国社会について学びたい、という学習意欲が高まりました。例えば、研修後の春学期から柳町功先生（総合政策学部教授）の研究会に入りました。今取り組んでいる研究テーマは、韓国の圧縮経済（韓国経済の急速的な発展）です。言語や文化だけではなく、経済や政治まで関心分野を広げることができました。

また、朝鮮語に対してのモチベーションも変化しました。現地の方と話したことによって、更に多く話せるようになりたい、という思いが高まりました。日々、韓国のドラマや難しいニュースを短い時間でも良いから聞くように心掛けています。聞き取れたものを和訳することで、理解を深めることも試みています。もともとスキルの授業まで履修するつもりはなかったのですが、今は開講されているスキルの三つの授業全てに出席しています。また、韓国語能力試験 TOPIK の勉強も始めました。とにかく、海外研修の刺激に強く影響を受けたと感じますね。

韓国には、留学でも旅行でも、また行きたいと思っています。海外研修中に行けなかった済州（チェジュ）島や釜山（プサン）などに行って、新鮮な海鮮を食べてみたいです。

最初から最後まで、本当に充実した海外研修でした。

（構成：藤井美来）

大川 有彩
（おおかわ・ありさ）

総合政策学部２年

寄稿 朝鮮語研究室

髙木丈也先生（総合政策学部専任講師）より

ＳＦＣの朝鮮語の授業は、「インテンシブ１」、「インテンシブ２」で発音・単語・文法を徹底的に学び、海外研修ではそれを使ってフィールドワークをしたり、自分の関心事項を探究できるようにカリキュラムがデザインされています。１年で新聞やニュースが理解できるレベルまで皆さんを鍛え上げますので、ややスパルタ式 (?) ですが、その効果は皆さんの先輩たちが証明済みです！　私たちの海外研修はＳＦＣ生用の専用プログラムで、授業以外にも現地大学生との交流や普通の観光旅行ではちょっと行けない場所の見学など、韓国・朝鮮の社会・文化を感じてもらう機会がたくさん用意されています (これまでにロッテやアモーレパシフィックの本社、日本大使館などの見学をしました)。もちろん単に見て聞くだけではなく、「現場」から韓国社会の何を感じ取るかを一緒に「考える」ことも大事にします。朝鮮語を勉強したあとは、他の言語を勉強するのもよし、研究会や大学院で皆さんの興味を徹底的に探究するもよし。大川さんも言うように「現場」での体験がステレオタイプやモチベーションを大きく変えることもあります。興味のある人は、ぜひ私たちと一緒に朝鮮語の世界を満喫しましょう！

Deutsch ドイツ語 ドイツ研修

松本 こころ

ドイツ語の海外研修に参加した、本誌編集員の松本こころ（総合政策学部三年）による体験記。

二〇二四年二月二十六日、フランクフルト・アム・マイン（Frankfurt am Main）に降り立ちました。初めてのドイツ、フランクフルト空港は思ったよりも閑散としていて静かでした。到着したターミナルから、研修先のドレスデン（Dresden）へ向かう特急（ＩＣＥ）の発着駅に向けて発車したシャトルバスは、メルセデスベンツ製の連節型。湘南台駅とＳＦＣを繋ぐ同じくベンツ製のツインライナーとほとんど同じデザインで、二十時間以上かけて遠い国までやって来たのに、早速見慣れたバスに乗っているのでなんだか変な気分になりました。バイパスのような道路を眺めながら、風景や人々の暮らしは日本でもドイツでも意外とそれほど違わないのかもと思いました。

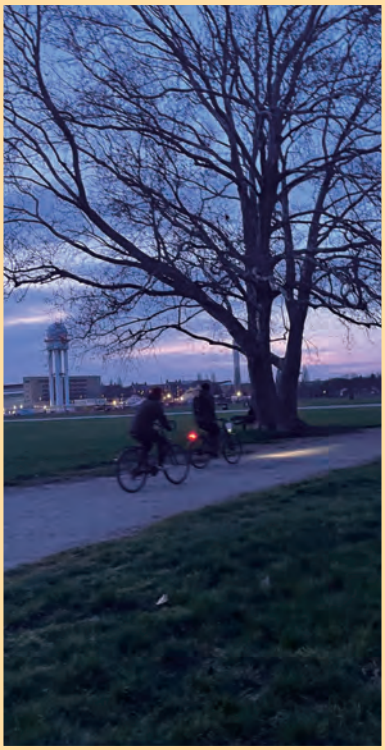
特急の席に着き、一息ついて窓の外を見ると、だだっ広い緑の中に、小さな教会と小川を中心に広がる集落。遠くには白い風車が立ち並び、たまに見かける牧場では馬や牛が放牧されていました。線路沿いの煉瓦塀にはカラフルな落書きがたくさん。窓から見える木々のあちこちにモシャモシャとした何かが毛玉のように絡みついていて、私と背中合わせの席に並んで座った二人の白髪の男性方は、新聞を片手に何やら議論をしていました。通路を挟んで隣の席では、大きなピアスを付けた女性がオンラインミーティングに参加しているもよう。車内で通話してはいけないという決まりはおそらくないのでしょう。急に「異国にいる」という実感が湧いてきました。

別にすごく違うわけではない。かといって、やっぱり同じというわけでもない。「全然違うんだ」と思ったり「思ったより同じじゃん」と感じたりしながら、誰かから聞いた情報だけでは分からない微妙な違いや共通点をこうして一つずつ学んでいくのかなと、これから始まる生活に思いをはせました。

到着した翌日、ＳＦＣのドイツ語の授業内で行われるタンデムプロジェクトで知り合ったドレスデンの友だちとハイキングに出かけました。ドイツでハイキングに行くことは「wandern」と呼ばれ、休みの過ごし方の定番だそうです。前日から気になっていた例の毛玉のような植物をここでも何度も見かけ、ドイツ語で何というのか尋ねてみると、それは「Miste」だと教えてくれました。日本語ではヤドリギ。家に帰ってから検索してみて、祖父母の家の庭にもあったことを思い出しました。なんだ、ドイツ特有の植物というわけじゃなかったんだ。と、少しがっかりすると同時に、本当にその国にしかない物なん

て実はそんなにないのではないかと思ったりもしました。ドレスデンから電車で一時間半ほどの、ポーランドと国境を接する街ゲルリッツ（Görlitz）に行った際には、国境を橋で渡り、ドイツ料理とよく似たポーランド料理を食べ、全く読めないポーランド語に囲まれながら、「国の違いによって決定的に異なること」と「国の違いにかかわらず同じこと、似ていること」について考えを巡らせました。

ドレスデンの語学学校での授業は、平日毎日九時に始まります。滞在していたキッチン付きのゲストハウスから、トラムと呼ばれる路面電車に乗って通学しました。授業は、知識が豊富でおしゃべりな先生が生徒に質問を振りながら喋りまくるというスタイルで、ドイツの歴史や貿易事情、社会保障システムといったトピックがメインの日もあれば、「北京ビキニって知ってる?」と古今東西の豆知識を披露される日もあり、その内容は様々でした。おかげで、使用した教科書に登場する文法自体は既習のものでしたが、毎日新しいことを学びました。十二時きっかりに授業は終わり、午後は日によって違う過ごし方をしました。街の中心を流れるエルベ川沿いの芝生で夕日を眺めたり、無料開放されている美術館に行ったり、公園でのんびりしたりする時間



が楽しみでした。

夕方には、大きな公園や河川敷で仕事帰りの大人やその子どもたちが自転車を走らせていて、晴れた日には、外でビールを飲んだり、バルコニーで日なたぼっこをしたりする人たちをたくさん見かけました。先生によると、ドイツでは、昼休憩の時間を極力短くして、できるだけ早く帰ることを望む人が多いのだそうです。仕事や勉強といった類いの「頑張ること」と、休息や遊びといった「力を抜くこと」のバランスとして、私にとってはこのくらいがちょうど心地よく感じました。もちろん、そのような生活リズムではない職業もあるでしょうし、定住してみて初めて分かることやドイツの課題もあるでしょうが、この労働文化や休みに対する姿勢を、できればそのまま持って帰りたいと思わずにはいられませんでした。

このようにして旅と呼ぶには少し長い一ヶ月という期間をドイツで過ごし、日々の気づきは数え切れないほどでした。

ドイツ語学習を通して一番変わったこと／今もなお変わり続けていることは何かと問われれば、世界の解像度が上がったこと／上がっていくことだと答えます。だからこそ、粗い目の網で情報をかき集めるのではなく、きちんと現地で自分の言葉を使って生活し、気がついたことは具体的に書き留め、丁寧にドイツを知っていきたいと思いました。それが、私が海外研修に行こうと決めた理由です。

私は、ＳＦＣに入学してからドイツ語を学び始めました。高校生の頃から、様々な小さな理由の積み重ねでなんとなくドイツに興味を持ってはいたものの、ドイツ語を勉強しようとしたことはありませんでした。心のどこかで「英語さえあればいい」と思っていたのです。インテンシブで一年半ドイツ語を学んだ後、スキル科目やコンテンツ科目でドイツ語を使う練習をし、研修前の学期には、授業の中で先生と共に海外研修の準備を進められるコースを履修しました。初めは大学での言語科目の選択にすぎなかった「ドイツ」が、気づけば私の大学生活の中で欠かせないキーワードになっていることに驚くばかりです。

「言語の学習は世界の視野を広げる窓」と言いますが、本当にその通りだと、研修を終えた今つくづく思います。ドイツ語は英語に似ていると思っていたけれど、現地でネイティブスピーカーのドイツ語を聞けば聞くほど、物事の捉え方の根本が違うと思える部分が多く見えてきました。また、研修先で様々な言語を話す人と出会うたび、世界に英語が広く普及していることの素晴らしさを味わうと同時に、英語以外の世界がどんなに広いかを痛感しました。

十月から、私は再びドレスデンに渡航します。交換留学生として、今度は一年間の生活です。この号が発行される頃には、ドイツでの生活にも慣れてきているでしょうか。つい先ほど、ドレスデンでできた友だちからメッセージが届きました。「Wann kommst du eigentlich wieder nach Dresden? Ich freue mich schon, dich wieder zu sehen!（ドレスデンにもう一度来るのはいつ？　また会えるのを楽しみにしているよ！）」到着日を伝えると、シェアフラットに一緒に住む人を募集しているという友人を紹介してくれました。どんなところに住み、どんな人たちと出会い、どんなことを学ぶのか。日々の気づきと生活を大切に、一年間、ドイツ語とドイツでの研究とに存分に浸かってみようと、送られてきた部屋の写真を眺めながら、わくわくしています。（二〇二四年九月記）

寄稿 ドイツ語海外研修について
藁谷郁美先生（総合政策学部教授）より

ドイツ語海外研修は、ドイツやオーストリアの大学が開講する約三週間のコースを対象としています。現地ではドイツ語の授業だけでなく、様々なプロジェクトが用意されています。また、各自の研究テーマに基づいたフィールドワークも実施します。学生たちはベルリンやフライブルク、ドレスデンなど研修先の大学によって環境に配慮した公共交通機関の事例調査、あるいは歴史博物館の展示事例調査など、地域行政や文化の特徴に紐づく研究・調査活動をしています。スキル科目「海外研修準備コース」を渡航前の学期に履修することでドイツ語を使ったフィールドワークの手法を習得できます。毎学期複数のドイツの大学と遠隔共同授業をおこなっているのですが、そこで知り合う現地の学生たちが「タンデムパートナー」となり、現地の情報収集や聞き取り調査を日独協働で実施する事が多いのも特徴の一つです。この体験が大切な人間関係を構築するきっかけにもなっています。

松本 こころ
（まつもと・こころ）

総合政策学部 3 年

フランス語 フランス研修

Français

渡辺 美桜

渡辺美桜さん（総合政策学部二年）は今春、フランス中部の街ヴィシー（Vichy）での海外研修に参加した。フランス語とじっくり向き合った一ヶ月。ホームステイ先や勉強の様子についてお話を伺った。

●フランス語に浸ったヴィシー生活

――ヴィシーはフランスのちょうど中心あたりに位置する街ですね。実際に行ってみて、ヴィシーはどのような街でしたか。

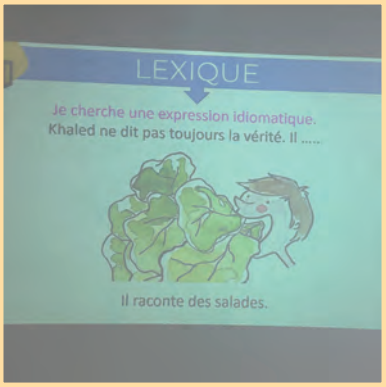
パリや、近郊のムーランほど都会ではありませんが、歴史ある建物が並び、真ん中にはアリー川という大きな川が流れるすてきな街です。私が通った語学学校Cavilam（カヴィラム）も長い歴史を持つ伝統校であり、研修先でフランス語としっかり向き合いたいと思っていた私にはぴったりの街でした。また、街全体に「学生を支えよう」というムードがあると感じました。私のホームステイ先は既に二十回ほど留学生の受け入れを経験している家庭で、「ミオ（渡辺さん）が帰った後にも別の日本人が来るのよ」とホストマザーが話していました。

――ホストファミリーはどのような方たちでしたか。

ホストマザーと十七歳のホストシスター、そして犬が一匹のご家族でした。どうしても私が聞き取れなかった時に、ホストマザーが頑張って英語で説明してくださることもありましたが、会話はほとんどフランス語でした。

二週目の半ば、夜に急に吐き気が止まらなくなったことがありました。「吐き気」「吐きそう」などというフランス語の単語を慌てて調べましたが、少し動けば吐いてしまいそうなほど吐き気がひどく、結局ホストマザーに自分で話しに行くことができませんでした。ホストシスターが、私がトイレに何度も駆け込んでいることに気がついてくれて、翌朝薬をもらい、その後二日ほど授業を休んで寝込みました。ホストファミリーの余裕と優しさに助けられた経験です。

症状が落ち着いてからは、「熱っぽい」や「喉が痛い」などという言葉も調べて、いつでも自分の体調を説明できるように準備しておきました。フランス語で言えるかどうかに生死が懸かっていると言っても過言ではないほどしんどかったので、体調不良に関する語彙はここで確実に覚えました。「vomir（嘔吐する）」という言葉を忘れることはないでしょう……。



●「ミオはどう思う?」
——研修先での授業について教えてください。

午前中は文法学習がメインの授業で、午後は「Atelier(アトリエ)」と呼ばれる、会話がメインの授業でした。午前の授業を担当していたマガリー先生は、いつもりんごを丸々一つ片手に持ち、齧りながら授業を進めていました。それがとても様になっていて、かっこよく見えました。板書の筆記体も美しく、思わず憧れてしまうような先生でした。

午前中の文法学習は余裕がありましたが、午後の授業は本当にしんどかったです。意見を突然尋ねられるんです。「ミオはどう思う?」って。考えていることがあっても、それをフランス語でどう言うか分からない。分からないのが単語一つならその場で教えてもらえばいいですが、動詞も目的語も形容詞も分からないから、全てを質問していたら会話が止まってしまう。意見を尋ねられても全く上手く答えられませんでした。

私のクラスメイトは、ほとんどが二十五歳前後で、中東から来た人たちでした。すでに結婚している人も多く、クラス内には三組の夫婦がいました。彼らは、今よりも良い仕事に就くために、フランス語を勉強しに来ています。だから、必死さというか、フランス語学習の意欲に差を感じました。それに、文法は間違っていても、少なくとも自分の思っていることはスラスラ伝えられる。グループワークの際には、その流暢なやりとりに入っていかないと、そもそもグループワークに関わることすらできませんでした。

このように、最初は会話の流れに付いていくだけで必死でしたが、おかげで今ではフランス語で簡単に自分の意見を言えるようになりました。研修の前後で一番大きな変化かもしれません。

――どのようなテーマでの意見を求められるのですか。

簡単な話題から社会的な問題まで、テーマは様々です。授業の中で、一つ、これはちゃんと知っておきたかったなと思ったのは、日本の出産手当についての知識です。様々な国からやって来たクラスメイトが自分の国の出産手当について答えていくなかで、私は「知らないです」と答えてしまいました。助成金や社会制度、政治といった話題について、もう少し知識があればと悔しく思いました。そういう日は家に帰ってから、インターネットで調べました。

なんとか三週間踏ん張って、研修が終わる頃にはだいぶ楽しめるようになったかなと思います。分からないことがある時には、「Qu'est-ce que c'est?（これは何?）」と遠慮せずに質問できるようにもなりました。

――研修先での印象的な出会いはありましたか。

カヴィラムでできたある友だちとの出会いが心に残っています。おおらかでハキハキした子で、初日から緊張している私に積極的に声を掛けてくれました。休み時間にコーヒーを分けてくれたり、ジブリ映画が好きだと言って、まだフランス語の会話がままならない私にもポスターの写真を見せながら話してくれたり。他の文化圏の人と交流することに慣れているんだなと思いつつ、心が救われました。

そうやって声を掛けてくれたのは、一人でいることの多かった私に気を遣ってくれた部分もあったと思います。でも、いつまでも「日本から来たばかりのフランス語が苦手な子」でいられるわけではありません。三週目くらいになると、私もちょっとした会話を広げられるようになり、それを彼女も分かってくれたのか、義務感や気遣いからではなく、純粋に会話を楽しむことができました。だんだんと対等な関係になっていけたのが、とても嬉しかったです。

●現地での言語学習のすすめ

――最後に、海外研修に参加することを検討している皆さんへ一言お願いします。

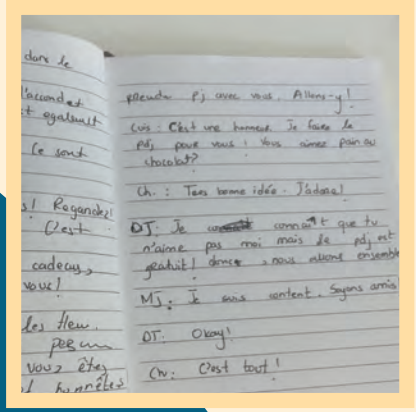
日本で勉強し続けることと、現地に行って勉強することの違いを痛感しました。私は自分でモチベーションを維持し、コツコツ努力するのが得意な方ではありません。だからこそ、逃げられない環境に身を置くのが、言語を身に付けるための一番の近道でした。

なんとなく言語学習を続けている人も多いかもしれませんが、一度現地に行ってみると、あの人とこういう会話がしたいとか、あの美術館に行って作品の解説を理解したいからこういうジャンルの語彙を知りたいとか、それこそ、自分の体調を説明できないと生き延びていけないとか、より切実で具体的なモチベーションを得られると思います。そして、絶対に成長して帰ってこられるはずです。ぜひ、海外研修に行ってみてください。

（構成：松本こころ）

渡辺 美桜
（わたなべ・みお）

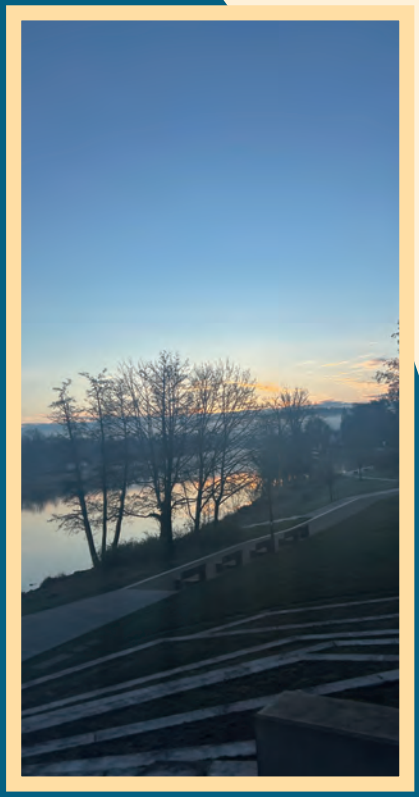
総合政策学部２年



寄稿 フランス語研究室

西川葉澄先生（総合政策学部専任講師）より

研修先の授業時間数によって４単位取得できる「フランス語海外研修 A」と、２単位取得できる「フランス語海外研修 B」があります。フランスのルーアン（Rouen）、ヴィシー（Vichy）、エクサンプロヴァンス（Aix-en-Provence）の指定の学校から研修先を選べます。宿泊はホームステイで、これまで教室で学習したフランス語を、学校と家庭、街中のリアルなフランス語環境で実際に使う体験ができます。現地の人々との交流で言語だけでなく、文化や社会について学ぶ機会にできるといいですね。ＳＦＣのフランス語海外研修では伝統的に学生の自主性を尊重しています。研修先、日程、研修期間などを自分で決定し、出発から帰国までを一連の主体的な学びの経験にしてください。教員は研修先の申込手続きや現地でのトラブル等に関してサポートはしますが、現地での引率は行いません。研修後の学生の成長ぶりをいつも楽しみにしています！



中国語 台湾研修

小野 響

世界最大の母語話者数を誇る中国語。その中国語が公用語として使用されている台湾での研修に参加した小野響さん（環境情報学部四年）にお話を伺った。

●海外研修参加のきっかけ

――海外研修に行く前の、SFCでの中国語の履修状況を教えてください。

私は大学に入学する前に、中国語の学習経験がありました。SFCではルール上、既習者は「インテンシブ1」から履修することはできないため、中国語の科挙試験（注1）というものを受け、一年生の秋学期に「インテンシブ3」を履修しました。中国語の授業がとても楽しかったので、二年生の春学期には続けて「インテンシブ4」を履修しました。そして二年生の秋学期に、中国語のスキル科目である「検定」と「サブカルチャー」（注2）の二つを履修しました。その後二〇二三年夏に台湾の研修に行くまでの一年半、中国語の授業は履修しませんでした。

――海外研修に行こうと思ったきっかけは何ですか。

友人の海外研修の経験談を聞いて興味を持ったのがきっかけです。一年生の秋学期に履修した「インテンシブ3」の授業で、学年が上の女性の履修者とすごく仲良くなりました。当時はオンライン授業でしたが、その人はコロナ禍以前に海外研修に参加していて、その話を聞いて楽しそうだと思っていました。当時はコロナ禍がいつ収束するか分からない状況だったので、いつか行けるといいねと言ってくれました。

●充実した研修生活

――研修先と研修期間について教えてください。

台湾の台北市に三週間滞在し、同市にある台湾師範大学で研修に参加しました。

――研修先の様子や授業はどうでしたか。

私の感覚では、研修に参加している学生の八割くらいは日本の大学生であったように思います。あとは韓国の学生とか、ちらほら欧米の方もいました。ただ、私の入っ

たクラスでは、先生が「この教室の中では中国語以外の言語で話してはいけない」というルールを最初に言ってくださって、休み時間でも教室内にいれば日本語を話すことはありませんでした。ですが、休み時間に廊下へ出たり、授業が終わってホテルに戻ったりすると、結構日本語が聞こえてくるというような環境でした。

授業は、語学の授業が朝九時から十二時までの大体三時間あり、午後は文化を学ぶ選択授業があるか、それがない日は自由行動でした。

初日に先生と一対一のスピーキングテストを受けて、自分のレベルに合ったクラスに振り分けられました。基本は現地で配られたテキストをもとに授業が進められました。

内容としては、SFCの中国語の授業と似ていると思います。単語と文法を習って、それをもとに作文をしたり、ペアワークをしたり、みんなの前で発表したりといった感じで、毎日授業に取り組んでいました。私がいたのは十人にも満たない少人数のクラスで、発言を求められる回数も多かったです。そのため、授業には本当に集中して、頭をフル回転させていました。

最初にスケジュールを受け取った時には、なんだ毎日三時間しかないのかと思いましたが、実際に授業を受けると結構へとへとになります。授業の予習や復習の時間も考えると、ちょうど良い長さだと感じました。小テストや听解（ティンジエ）（注3）もたくさんありました。SFCではオンラインで中国語の授業を受けていたので、パソコンのキーボードで漢字をタイピングすることは身に付けていましたが、手で書くことはほとんどありませんでした。しかし、研修先の授業では、全部手書きで漢字をひたすら書いていました。日本人だと間違いやすい漢字があ

り、それがトリッキーでした。

その他にも、文化を学ぶ選択授業がありました。私は台湾茶道と太極拳、台湾語を選択しました。また、遠足に行く課外学習もあって、行き先の希望が必ず通るわけではないのですが、遊園地や十分（シーフェン）（注4）に行けたりして、すごく楽しかったです。

――SFCの授業と異なる点はありましたか。

インプットした後にすぐアウトプットするという機会は、SFCでの授業よりも多くあったように思います。先生が中国語で説明をしてくれるという点は同じですが、研修先の授業では自分も全て中国語で答える必要がありました。一番難しいと感じたのが、自分の分からないところを中国語で話して、先生に説明をお願いすることです。やはり、そういったアウトプットの機会がたくさんあるというところが、SFCの授業とは違う点だと思いました。

また、研修先の授業はSFCの中国語の授業と同じく簡体字を使って行われましたが、台湾では繁体字が使われています（注5）。最初は不安もありましたが、街中で見る文字には、授業で習ったワードがそのまま簡体字で見られたり、繁体字で表されていたりして、それはそれで興味深かったですね。また、中国語の他に台湾語という言語もあり、それは私には全く別の言語で、聞いても理解できませんでした。しかし、もちろん現地の方は普通話（プートンホワ）（注6）も分かるので、コミュニケーションを取ることはできました。

●帰国後の変化

――帰国後、台湾での海外研修の成果を感じることはありましたか。

はい。特にリスニング力が伸びたのを実感しました。それこそ中国語を四六時中聞いていたし、ホテルでもテレビをつけっぱなしにしていたので（笑）。今まで中国語は聞き流していましたが、帰国後は単語が結構聞き取れるようになり、研修に行った成果が出ているなと思いました。それから、三週間の授業中は、どうにかして自分の言いたいことを喋ってみるという環境にいたので、帰国後は、何かしら言ってみようかなと、自分から話し出しやすくなったというか、一歩踏み出しやすくなったと思います。中国語を話す機会が帰国後は減ってしまったのが残念ですが、研修に参加したおかげで、話す力は伸びたと思います。

――最後に、海外研修に興味を持っている学生に一言お願いします。

私は参加をお勧めします！　もちろん金銭的な課題などいろいろあるとは思いますが、興味があったらぜひ行かれると、得るものはたくさんあるはずです。

（構成：東史華）

注1　科挙試験：SFC中国語研究室が実施する資格認定試験。毎年、学期開始直前の三月と九月に行われ、合格すると、レベルに応じて上級クラスの履修が認められる。

注2　中国語スキル：「インテンシブ3」、「ベーシック3」まで学び終えた学生を対象に開講している科目。様々なテーマがあり、「検定」「サブカルチャー」はスキル科目の一部である。（「サブカルチャー」科目は二〇二二年以降開講されていない。）

注3　听解（ティンジエ）：日本語では聴解。小テストで出題されるリスニングの問題のこと。

注4　十分（シーフェン）：地名。「じゅうふん」とも。「天燈（ランタン）

上げ」体験ができることで有名。

注5　繁体字と簡体字：中国語圏で使用される漢字の種類。簡体字は、伝統的な字体である繁体字を簡略化したもの。簡体字は大陸、繁体字は香港、マカオ、台湾で使用されている。

注6　普通话（プートンホワ）：日本語では普通話。中華人民共和国が定めた現代中国語の標準語のこと。簡体字を使う。ＳＦＣの中国語の授業で学ぶ言語。

小野 響
（おの・ひびき）

環境情報学部４年

寄稿 中国語研究室

宮本大輔先生（総合政策学部准教授）より

ＳＦＣの中国語海外研修は、北京大学（４週間）、台湾師範大学（３週間）で実施しており、中国語研究室では、学生が授業で身に付けた中国語を、中国語圏において実践し、より高度な中国語運用能力を習得する機会として位置付けています。また、中国語学習のほか、実際に中国や台湾に赴き、現地の人々と出会い、交流し、中国語圏の社会や文化、歴史等を経験することは、参加した皆さんが見識を深め、新たな視点、気づきに繋がる重要な役割を果たしていると考えています。

研修先によって若干の違いはありますが、研修中は基本的に平日の午前中に中国語の授業があり、午後は中国文化体験講座が行われ、週末は北京であれば長城や天安門、台北であれば故宮博物院や九份等（注）の見学ツアーが予定されています。教員は同行しませんが、中国語の授業は習熟度別に行われることに加え、現地でのサポート体制も整っているため、中国語学習歴が短い方、完全な初心者でも安心して参加することができます。

（注）見学先は変更となる場合があります。

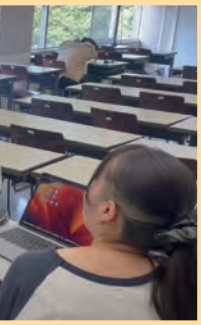
SFCで学びを深める4言語

寄稿

SFCで学ぶことのできる言語はまだまだある。授業について、先生方に紹介していただいた。

英語
中浜優子先生
（環境情報学部教授）
より

英語研究室では、海外研修を実施していませんが、ＳＦＣにいながら英語圏・その他の文化を英語で学んでいただけるような授業を展開しています。英語のクラスは、レベル別に分け、英語インテンシブ、プロジェクト英語 A、B、C がありますが、既習言語であることからも、すべてのコースで、「英語を学ぶ」ではなく、「英語で学ぶ」を実践しています。私の担当する「プロジェクト英語 B」：Learn English by Watching and Making Movies では、文化的側面を含む、文脈内の適切な英語使用を、海外研究者数名と共同で作成した映画教材を用い、学んでもらっています。最終的には授業で学んだ言語・準言語・非言語スキルを活かし、英語で映画を制作します。履修生の学期終盤での英語力の飛躍はもとより、熱心にコミュニケーションに取り組む姿は賞賛に値するものです。私のクラスに限らず、英語セクションでは、授業内外で、実践的な英語力上達のためのサポートを提供しているので、是非、ＳＦＣの「英語で学ぶ」を経験してください。



↑英語の授業で作られた動画の様子

日本語
杉原由美先生
（総合政策学部准教授）
より

日本語デジタルストーリーテリング：夏の特別研究プロジェクト

日本語研究室では、コロナ禍が収束して国際学生が日本に入国可能になった 2022 年から毎年、夏の特別研究プロジェクトとして、日本語初級～中級の学生が主対象の「日本語デジタルストーリーテリング」を開講しています。

デジタルストーリーテリングは、自分について語る３分ぐらいの動画で、写真や映像と合わせたストーリーを作成します。作品のタイトルは「猫ラブ」「生きる理由」「推しと自分」「人々をつなげるもの」「パラ大学祭」「心のセルフケア」「ことばがひらく世界」「夢があれば叶うために背伸びしなければなりません」等。

自分について話したりスクリプトを書いたり話し合ったりする中で「自分らしい」日本語使用を追求することが、醍醐味です。最後に作品を鑑賞して、複数言語を交えてお互いの考えを共有し合います。履修者が日本語使用者としての自分に希望や次なる課題を見出すことができるこの特プロ、今年も 25 名が参加しました！

↑ 2024 年の特別研究プロジェクトの様子

←日本語の授業で作られた動画の様子

イタリア語
三森のぞみ先生
（総合政策学部
非常勤講師）
より

↑三森先生が撮影したフィレンツェの街並み

現在、ＳＦＣで開講されているイタリア語の授業はイタリア語「ベーシック１」と「ベーシック２」のみで、初歩的な言語コミュニケーション能力を養うための一般的な語学学習が中心となっています。折にふれてイタリアの文化や社会を紹介し、映画鑑賞を行うこともありますが、残念ながら、授業外の活動を実施するのは難しいのが現状です。そこで、履修者の皆さんが生きたイタリア語やイタリア文化に少しでも触れられるよう、関連する催しなどの情報提供に努めています。例えば、2001 年から初夏に開催されている「イタリア映画祭」では、最新のイタリア映画が上映されます。2020 年から一部の作品はオンラインでも観られるようになりました。また、イタリア外務省の出先機関であるイタリア文化会館は、講演会やコンサート、留学フェアなどを主催しています。特に毎年秋に開催される「世界イタリア語週間」では、日伊の学生交流も含め、多彩なイヴェントを楽しむことができます。

↑ちょっとカオスな感じのショッピングビルの看板。マリ･エル共和国ヨシカル･オラ市。（2016 年 1 月）

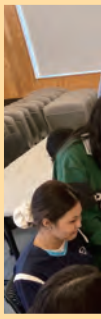
鉄道駅の 2 言語表記（ロシア語 · 英語）。タタールスタン共和国ゼレノドリスク市。（2016 年 1 月）↓

ロシア語
田中孝史先生
（総合政策学部
非常勤講師）
より

Здравствуйте！（ズドラーストヴィイチェ「こんにちは」）

日本の隣国であるロシア連邦の国家語であるロシア語は、中央アジア、ヨーロッパに多くの話者がおり、ロシア語を通して得られる情報の豊富さ、重要度の観点からも魅力のある言語です。

残念ながら現在は、現地留学は難しくなっていますが、インターネットのお陰で、最新のニュースだけでなく、懐かしのアニメや有名な映画、笑えるリール動画も、なんなら現地の様子もライブで見ることができ、授業でも多く活用しています。またスマホの音声認識の精度も高くなっており、うまく使えば自分の発音が（ある程度）正確かどうか、手元で検証できたりします。ロシアによるウクライナ侵攻後、日本におけるロシア語の学習者は増えています。ロシア語を通じて他のスラブ語やロシア国内の少数言語を学ぶことも可能です。過去・現在・未来につながる扉を、ロシア語を使って少し開いてみませんか？



看護医療学部
「国際看護実践Ⅱ」韓国研修

福留 光琉

看護医療学部ではカナダやイギリス、ラオスなどで様々な海外研修プログラムが開講されている。その一つである「国際看護実践Ⅱ」について、韓国・ソウルのウルチ大学で昨年度の八月に履修した福留光琉さん（看護医療学部四年）にお話を伺った。

●行くつもりはなかったが、初めて海外に

――なぜ海外研修に参加しようと思ったのですか。

正直、初めは全く参加するつもりはありませんでした。海外に行ったことがなかったので、ハードルが高いと感じていました。

しかし、参加人数に空きが出て再募集していたことがきっかけで、興味を持ち始めました。同級生の参加者全員と仲が良かったので、「この子たちとなら行ってみようかな」と思い参加を決めました。

――人生で初めて海外に渡り、そこで研修を受けることについて、期待や不安はありましたか。

大学生のうちでなければ経験できないようなことを期待していました。私は、三年生になるまで国際看護についてあまり勉強していませんでした。看護医療学部では必修の英語で医療英語をある程度学習しますが、さらに詳しい医療英語や国際看護に関する科目は選択科目で設置されています。

国際看護の履修者は海外で看護師になりたい人や、赤十字といった紛争地などで活動するNGOに興味がある人が多いですね。私はこの海外研修をきっかけに国際看護に興味を持てたらいいなと考えていました。

不安だったことはやはり、初めての海外ということです。行くこと自体も不安でしたし、英語で国際看護について学ぶので、英語が分かるかどうかも不安でした。実際に行ってみたら案外なんとかなりました。

――海外研修に行く前に特別に学習したことはありますか。

韓国研修が行われたのは八月上旬でしたが、七月末まで学期末試験があり、英語の復習はあまりできないまま行くことになりました。でも、研修の参加者には、事前学習の機会がありました。日本の医療制度や人口ピラミッドを勉強したことで、韓国の学生から「日本はどう?」と尋ねられた時に、きちんと答えることができました。

●“What to keep, what to change”

――韓国では何を学習したのですか。

研修のテーマは“What to keep, what to change”でした。デジタル化や国際化など、看護の世界でも時代の変化と共に様々なことが変わっています。その中で、変わらないように守っていくべきものと、時代に応じて変えていくべきものは何かというのが大きなテーマです。このテーマについてグループでディスカッションし、発表を行いました。四人で一つのグループを組みます。韓国人と日本人がそれぞれ二人ずつでした。

韓国の病院見学もありました。いろいろな施設に全員で行って、そこで学んだことをグループの四人で話し合いました。

――韓国の病院は日本と違いましたか。

病院内のデジタル化にとても驚きました。例えば、患者さんの部屋にはディスプレイがあり、ボタンを押すと自分が服用している薬などの情報がすぐ見られるようになっています。

他にびっくりしたことは、家族の存在の大きさです。日本では入院患者さんの身の回りのケアは看護師が中心で行い、ご家族はお見舞いに来ます。しかし韓国では、家族が中心に行っており、ほぼずっと入院に付き添っていました。その分、韓国の看護師は日本の看護師よりも受け持つ患者さんの数が非常に多く、忙しいとのことです。

それでも、日本と韓国は違うところよりも似ているところの方が多いという印象を持ちました。特に患者さんをとても大切にしているところは一緒だと感じます。守っていくべき看護の在り方について韓国の学生とディスカッションをした時にも、「人が行う看護は保つべきだよね」という話になりました。韓国語でも、相手を大切に思う「情」を意味する言葉があるそうです。

韓国で「国際看護実践Ⅱ」という海外研修に参加した半年後には、「国際看護実践Ⅰ」をＳＦＣと信濃町キャンパスで受けました。夏に私たちを迎えてくれたウルチ大学の学生さんや、アメリカ、中国など六カ国の学生さんが日本に来てくれて、それぞれの国の医療について勉強しました。この授業を通して、日本や韓国、中国の学生は、他の国の学生と比べると、医療についての考え方などが似ていると感じました。少子高齢化など同じ社会背景を持っていることも一因かもしれません。

一つの例として、日本の病室はベッドごとにカーテンで閉められるようになっていますが、国によっては全くカーテンがなくて全部見えっぱなしの国もあるそうです。その点では、韓国の病室は割と日本に似た感じでした。

●韓国の学生との交流

――韓国で交流した学生が日本に来たのですか。

はい、半年後に同じ学生さんと再会することができるんです。二回会うとさらに仲が深まりました。実は、今年の夏も個人的に韓国に行ってきました。海外研修で一緒になったウルチ大学の子の家に泊めてもらったんです。そういう長く繋がる友人ができたことがとても嬉しいです。

研修中も彼女たちに、ロッテワールドという大きな遊園地や、綺麗にライトアップされたハンガン公園などに連れて行ってもらいました。研修プログラムは毎日十七時まで続きますが、その後は外食や観光を含めて自由に過ごしていました。

フリータイムも研修プログラムでグループを組んだ四人で行動していましたね。七日間ずっと一緒に行動したことで、仲が本当に深まりました。一緒に遊んで仲良くなったからこそ学べたこともあるし、ディスカッションもしやすくなったと思います。

――韓国の学生とはどのようにコミュニケーションを取ったのですか。

英語を使って直接会話をすることもありましたし、日韓の翻訳アプリを活用したこともありました。日本語と韓国語には、発音の似ている言葉がたくさんあります。日本人同士が日本語で「これって英語でなんて言うんだっけ?」と話していると、韓国語で「これのこと?」と言ってくれたこともありました。プログラムの後半になると、正確な英語を話せなくてもなんとなくコミュニケーションが取れているような感覚がありました。

●日本から世界の看護を

――研修に参加したことで、ご自身に変化はありましたか。

研修から帰ってきた直後は、英語を使いたいという気持ちが強くなっていました。また、看護の視点だと、日本国外の看護のことも考えられるようになりました。私は小児科病院に就職しますが、日本の中でより良い看護ができるように頑張れば、その知見が共有されて、世界の医療もより良くなると思うようになりました。見える世界が広がったのはこの海外研修のおかげです。

（構成：吉松野乃子）

福留 光琉
（ふくとめ・ひかる）

看護医療学部４年

寄稿 世界の健康課題に挑む力を養う
小池智子先生（看護医療学部准教授）より

世界は様々なレベルの健康課題を抱えています。開発途上の地域ではマラリアなどの感染性疾患が、経済的に裕福な地域では糖尿病などの生活習慣関連疾患や高齢化に伴う認知症の増加が課題ですし、国境を越えて拡大する新興感染症は世界が協働して取り組まなければならない課題です。このような課題の解決に向け、各国の医療専門職は連携・協働して取り組んでいます。

そこで、看護医療学部ではグローバルな観点から健康課題を捉え、多様性を踏まえた柔軟な発想や行動力を養う場として、五つのフィールドワーク型の海外研修科目「臨床看護実践（海外）」（アメリカ）、「世界の医療・保健制度 II（海外研修）」（イギリス）、「プライマリーヘルスケアと国際保健 II（海外研修）」（ラオス）、「看護医療の英語 II」（カナダ）、「国際看護実践 II」（韓国）を設置しています。五科目合計で毎年約五十～六十名の学生が、各国の医療現場等で体験を重ね学んでいます。

わたしの推薦図書

堀口 崇

連載 No.14

少年時代、夜空を眺めて宇宙の果てを想像しては、無限の空間や人智を超えた力に畏敬の念を感じた。同時期に鑑賞したディズニー映画「ファンタジア」の第四セグメントは、ストラヴィンスキー作曲の「春の祭典」に、ビックバンから生命誕生を経て、地球を支配した恐竜が絶滅に至るまでを重ねたアニメーションで、生命の神秘と悠久の時に魅了された。高校生までは、医師だった父の蔵書から医学史の本を選んで読んでいた。そんな僕は生命と向き合う医者になった。日常読むのはもっぱら専門書や論文だが、スキマ時間には、幼少期の体験が刷り込まれた愛読書を開く。

僕が本稿であなたと共有したいのは、生命は神秘に満ちた奇跡そのもので、人智の及ばない力が働いて今があり、地球上で与えられた人生は素晴らしいという実感だ。一三五億年の時を経て、宇宙が生まれ、地球が生まれ、生命が生まれ、幾多の自然選択と進化を繰り返して人が生まれ、人類史の先端で僕たちは今を生きている。

カール・セーガン著『**COSMOS（上・下）**』（朝日新聞社）は、十五歳の僕が夢中になったテレビ番組の書籍版だ。コーネル大学教授の天文学者が誘う、十三章からなる壮大な「宇宙と生命の神秘」を旅する物語である。人類のあくなき宇宙探究史、地球と太陽系惑星、銀河系と宇宙の果て、ビッグ・バン宇宙論などが解説されるが、根幹にある著者の考えは「私達の身体は全て星の物質でできていること」だ。「宇宙を知ることは、生命誕生から進化や遺伝に至るまで、私達を探求すること」であり、最終章「地球のために」では核戦争後の地球にも触れ、「より良い地球を残せるかどうかは、我々にかかっている」と次世代の若者にメッセージを投げかける。四十年以上前の本ながら魅力が全く色褪せていないことに感動する。広がり続ける戦火、人口爆発、貧困・環境汚染問題などを抱えた現代に生きるあなたに読んで欲しい「宇宙と生命の賛歌」である。

ニール・シュービン著『**ヒトのなかの魚、魚のなかのヒト**』（早川書房）は、あなたを三十五億年におよぶ生物進化の旅に誘う。著者は魚を研究する古生物学者でありながら、シカゴ大学医学部で解剖学の講義を行っている。進化史上重要なミッシング・リンクである「腕立て伏せができる魚」の発見者とはいえ、考古学者が解剖の講義をすると知った医学生たちは、「授業料を返せ」と言いたそうな目つきになるらしい。ところが、ヒトに秘められた魚の構造、あるいは、魚に秘められたヒトの構造が、ヒトの解剖学のみならず、進化発達生物学や遺伝子科学に通じることを知るや、学生の目が輝き始めるのだ。最終章「すべての証拠が語ること」では、この進化が綿密な計画に基づいておらず、魚由来のありあわせの器官をやりくりして不合理な矛盾を抱え込んだ結果であり、そのために、ヒトがある種の病気になることも解説している。また、周りが次々と化石を発見する中で、著者だけが何も発見できない苦しい時期が続いた経験を通じ、失敗から何を学ぶかという人生訓も綴られている。あわせて『**あなたのなかの宇宙**』（早川書房）もお読みいただき、宇宙と地球と生命とが織りなす調和を堪能すれば、私たちの中に刻まれた最も深遠な物語によって、酸素や炭素すら愛おしく感じられる。

宇宙と進化の次は、シッダールタ・

ムカジー著『**病の皇帝「がん」に挑む（上・下）**』（早川書房）であなたを医学の世界に誘おう。生物にとって、遺伝子により同じ性質の種族を増やす能力を獲得できたことは、激変する環境に適した生存者を繁栄させる重要な戦略となった。また、進化の過程で生じる遺伝子変化は生物多様性も生んだ。しかし、遺伝子変化は時に牙を剥き、宿主を生存の危機にさらす。人類は、紀元前から現在に至るまで、遺伝子に起こる変化が生み出す病で、「皇帝」のような強大な影響力を持ち、克服困難な「がん」と闘ってきた。本書の副題は「人類４０００年の苦闘」であり、がんに侵された患者、治療に当たる医師、治療法の開発に人生をかけた研究者たちの挑戦と闘いの歴史を綴るノンフィクションである。読み始めて驚愕するのは、綿密な調査と膨大な情報量に基づいた、科学的に高度な内容を平易に表現する圧倒的な筆力だ。本書を読み終えたあなたには、遺伝子の発見から最新の遺伝子工学に至るまでを詳細に綴った『**遺伝子（上・下）**』（早川書房）もお勧めしたい。四十年前にセーガン教授は、「ゲノム編集ができる時代」の到来を予言し、「はっとするような不安な未来だ」と述べた。我々はまさにその時代に生きている。著者は、自身の家族の遺伝子病に関するエピソードを取り上げ、科学技術と倫理の間で、遺伝子研究が個人や家族に及ぼす影響も問いかける。

ユルゲン・トールヴァルド著『**近代医学のあけぼの**』（へるす出版）には強い思い入れがある。父の蔵書だった『外科の夜明け』（講談社）は、中学時代に何度も繰り返し読んだが、実家を出た僕の手から離れてしまった。医学部に進んで久々に読みたくなったが、絶版で入手できないと知った時はショックだった。ところが、二〇〇七年に新訳・完訳版の本書が刊行されたと知り、喜び勇んで即日購入した。少年時代と現在との時間旅行を体感しつつ、愛読書との運命の再会に心から感激した。現在では、ごく当たり前の外科手術だが、その黎明期は悲惨だった。後に『種の起源』を著すことになる若き日のチャールズ・ダーウィンは、志半ばにして医学を捨てた。手術室の凄惨な状況を見聞きすることに耐え切れなかったからだ。麻酔もない、細菌学もない、術中術後の悪夢の様な激痛と感染症が必発だった暗黒の時代から、先駆者たちの想像を絶する厳しく苦しい闘いの末、ようやく近代医学の時代へと大転換できたのは僅か百五十年前だ。本書は医書専門の出版社が発刊しており、あまり知られていないが、あなたが医療者でなくても、本書の原題である「外科医の世紀」を生きていたかのような臨場感に溢れる隠れた名著である。

最後に、詳細は省くが、僕が最近ハマってしまったサイモン・シン著『**フェルマーの最終定理**』『**暗号解読（上・下）**』『**代替医療解剖**』『**宇宙創生（上・下）**』（新潮文庫）をお勧めしたい。素粒子物理学者にしてジャーナリスト、プロデューサーの肩書をも持つ稀代のストーリーテラーによる科学歴史ドキュメントのいずれもが、あなたを捉えて離さないだろう。

科学の世界で過去と現在を自由に往復できる数冊を紹介した。ヒポクラテスは「Ars longa, vita brevis（芸術は長く、人生は短い）」と言った。本稿があなたの豊かで幸せな人生の一助になれば望外の喜びである。

堀口 崇

（ほりぐち・たかし）

看護医療学部教授

専門分野は、急性期病態学 / 脳神経外科 / 脳神経外科手術微小解剖 / 脳疾患の予防と疫学

新連載

新任
教員プロフィール

2023年9月から2024年9月の間にＳＦＣに着任された教員の方々を対象にアンケートを実施し、趣味と学生時代の思い出についてご回答いただいた。
教員の本務となる所属学部・所属研究科ごとに五十音順に掲載。
本誌特別号第75号『THE BRAIN：湘南藤沢キャンパス教員プロフィール』（2023年10月発行）と併せて、授業や研究会を調べる足掛かりにしてほしい。

佐藤　豪竜
SATO KORYU

総合政策学部専任講師

speciality

医療経済学 / 社会疫学

趣味　釣り、美食、飲酒。

学生時代の思い出　フィリピンとインドネシアの農村でそれぞれ１か月調査をしたことが思い出に残っています。３～４年生の時は、開発経済学ゼミでの研究に没頭していました。卒業後は省庁に就職してしばらく研究から離れていたのですが、留学先で研究の面白さに再び触れて、教員として大学に戻ってきてしまいました。

徐　旻廷
SEO MINJUNG

総合政策学部訪問講師（招聘）

speciality

社会言語学 / 朝鮮語学

趣味　ピアノ、音楽鑑賞、旅行。

学生時代の思い出　学生時代、初めてのヨーロッパ一人旅をしました。旅行地について調べたり、計画を立てたりすることも楽しかったし、とても勉強になりました。そして、旅行地で出会った世界各国の人々と友達になったことはかけがえのない思い出になりました。

千田　健太
CHIDA KENTA

総合政策学部専任講師（有期）

speciality

フェンシング / スポーツ運動学 / スポーツバイオメカニクス

趣味　食が好きなので、美味しいお店を探すことや、最近は家で凝った料理を作ることもしています。

学生時代の思い出　学生時代は体育会活動の遠征が多く、授業を欠席する事もありましたが、同じクラスの友達にノートを見せてもらったりと、仲間に助けてもらいながらなんとかテストを乗り切る事ができました。

伴野　崇生
TOMONO TAKAO

総合政策学部准教授（有期）

speciality

日本語教育 / 文化心理学 / 難民研究

趣味　俳句と散歩。俳句は句会で本格的に。散歩はゆるゆると。

学生時代の思い出　ＳＦＣの卒業生（９期生）です。インテンシブ中国語１・２・３→交換留学で香港中文大学に１年間留学。中国語・廣東語にハマってました。複数言語の user になり、様々な人たちと言語的につながることができた経験は今の実践にも活かされています。

藤田　元信
FUJITA MOTONOBU

総合政策学部教授（有期）

speciality

科学技術政策 / 技術戦略 / 国家安全保障 / システムズエンジニアリング

趣味　模型製作と軍事博物館巡り。文献を調べ、技術の発展に思いを馳せながら時間をかけて模型作りを楽しんでいます。

学生時代の思い出　友人らとともに、初期の Macintosh を分解し、筐体の内側に刻印されているサインを発見しました。開発者の遊び心が込められていたのでしょう。たとえ目立たなくても、後世に残る仕事をしたいと思いました。

趣味　音楽と珈琲、機上の映画鑑賞、下手な料理、原稿書き、猫。

学生時代の思い出　音楽サークルでの演奏と雑誌創刊（29 周年）、豪州留学、ディベート、映画、古書店巡りの日々。米大学院では銃声に驚き寒さに凍えての辛い猛勉強でした。学生時代は人生を変える読書と旅、生涯の友と師に出会い、大いに怒り感動し涙を流して下さい。

渡辺　将人
WATANABE MASAHITO

総合政策学部准教授

speciality

アメリカ政治・外交

趣味　ピラティス、美術館･博物館めぐり。

学生時代の思い出　イギリス留学時、スコットランドのハイランド地方にあるコテージで、友人たちとひと夏を過ごしました。見渡す限りの丘陵には静かに草をはむ羊たち。シンプルな食事とハイキング、楽しい会話。人間らしい生き方について考えた大切な思い出です。

石渕　理恵子
ISHIBUCHI RIEKO

環境情報学部専任講師
（有期・テニュアトラック）

speciality

英国ルネサンス期文学・文化

趣味　映画鑑賞。

学生時代の思い出　大学院生時代、大学院棟の広いフロアにはさまざまな分野の学生の席がありました。私の席の周りでは決まった時間にお茶をする習慣があり、別の研究棟に席のある学生まで集まって、研究話や出張先の出来事などを話したことが一番の思い出です。

内山　映子
UCHIYAMA EIKO

環境情報学部教授（有期）

speciality

地域福祉

2024 年 9 月着任

趣味　散歩、おいしいお酒を飲むこと。

学生時代の思い出　大学３年生のときに模擬裁判実行委員会の営業担当として、県内の学校や企業の方々に協力をお願いに回ったことをよく覚えています。トラブルのたびに夜遅くまで他のメンバーと話し合ったり飲んだりと、悩みもありましたが楽しい時間を過ごせました。

栗原　渉
KURIHARA WATARU

環境情報学部准教授（有期）

speciality

情報通信政策

趣味　自転車旅、島旅、まちあるき、（古）書店や和菓子屋巡り。

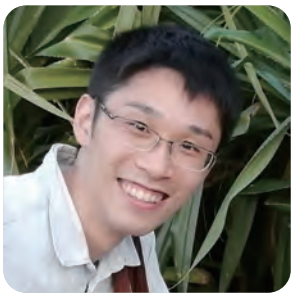
学生時代の思い出　今しかできないことをしたいと、自転車にテントや鍋を積んで、長期休暇に日本各地を旅していました。初の海外旅行はギリシャ３週間の自転車旅。なぜか記憶に残るのは、憧れの目的地よりも、道中のハプニングや仲間との何気ない会話、親切な人との出会い。

清水　亮
SHIMIZU RYO

環境情報学部専任講師

speciality

社会学 / フィールドワーク / 記憶論 / 生活史



巴山 竜来
HAYAMA TATSUKI

環境情報学部准教授

speciality

数学 (複素幾何学)/ デザイン・アートへの数学の応用

趣味 コロナ禍の頃からスケボーをはじめました。

学生時代の思い出 大学生の頃は映画をよく見ていました。見た映画の情報を整理するために、Web サーバ上で動く自分用の映画メモプログラムを書いたのが、プログラミングの原体験です。

山田 貴子
YAMADA TAKAKO

環境情報学部専任講師（有期）

speciality

共創のための場づくり / セーフティネット構築

趣味 子どもたちと思いっきり遊ぶこと。

学生時代の思い出 ＳＦＣで夜遅くまで残留してみんなで課題に取り組んだり、鴨池でゴロゴロしながらアイスを食べたり、キャンパス内をスケートボードで走って怒られたり……。学生時代にフィリピンへフィールドワークに何度も行ったことが今の研究の原点です。

横山 大輔
YOKOYAMA DAISUKE

環境情報学部准教授（有期）

speciality

都市・地域計画 / 都市開発

2024 年 9 月着任

趣味 まち歩き（特に、旧街道、集落）。

学生時代の思い出 研究室配属以降、「研究室」という独特な空間を心地よく感じ、常に滞在していたことを思い出します。振り返ると、個人研究の遂行はもちろん、研究室メンバーとのやり取りや、収蔵論文・本を読む時間は、私にとってかけがえのないものでした。

和田 直樹
WADA NAOKI

環境情報学部准教授（有期）

speciality

環境政策 / 環境システム分析

趣味 料理。作るのも食べるのも楽しんでいます。

学生時代の思い出 サークルでオーケストラに所属していました。大学からチェロをはじめ、年 2 回の合宿や、仲間の家に入りびたったり。週末はほぼ練習でした。そんなに上手ではありませんが、途中から友人とカルテットをしたり音楽の楽しみ方を学んだ気がします。

木原 盾
KIHARA TATE

政策・メディア研究科専任講師

speciality

人口学 / 社会学 / 移民研究

趣味 一人で散歩することが大好きです。ただ、子どもが産まれ、最近は子どもとの時間をとることを大事にするようにしています。

学生時代の思い出 学部 3 年生の時、フランス人とルクセンブルク人のルームメイトとバンクーバーからロサンゼルスまで Highway 101 と 1 を数日かけてドライブしたことです。オレゴンの森やカリフォルニアの海岸沿いの雄大な景色は心に焼き付いています。

趣味　古典舞踊、ピアノ、テニス、旅、ファッション。

学生時代の思い出　２７歳から建築の勉強を始めたため、学生時代はほとんど寝る暇もなく、キャンパスを横切る時間さえ惜しいと思っていました。アメリカの大学での５年間は、人生で最も集中した時間で、２０代の全エネルギーを使い切った達成感を今でも覚えています。

細谷　浩美
HOSOYA HIROMI

政策・メディア研究科教授（有期）

speciality

建築 / 建築設計 / 都市デザイン

趣味　バスケ。

学生時代の思い出　在学中、数十年ぶりに本塾医学部女子バスケットボール部が復活し、入部しました。ＳＦＣや信濃町でいつもボールを身につけて通学していた日々が、とても懐かしいです。様々な大会で結果を残すこともでき、とても貴重な経験ができました！

井上　真帆
INOUE MAHO

看護医療学部助教（有期）

speciality

がん看護学

趣味　ホットヨガです。

学生時代の思い出　長く、時につらい実習や国家試験勉強を共に乗り越えた仲間５人で行った卒業旅行です。行き先は、それぞれが行きたい場所をプレゼンしてプラハとウィーンに決定！　仲間と歩いたプラハの街並みとウィーンで鑑賞した難解なコンサートは最高の思い出です。

大坂　香純
OSAKA KAZUMI

看護医療学部助教（有期）

speciality

母性看護学 助産学

趣味　旅行、ウクレレ（初心者）、面白い絵本を探す。

学生時代の思い出　慶應マリンというヨットサークルに所属し、毎週末逗子で合宿生活をしていました。朝６時起床、リアカーをひいてハーバーへ行き、風さえ基準以下なら雨の日も雪の日も練習しました。七夕祭で焼き鳥焼いたりもしました。当時の仲間とは今も仲良しです。

加藤　由希子
KATO YUKIKO

看護医療学部助教（有期）

speciality

感染症保健 / 母子保健

趣味　クラシックバレエ、ダイビング。

学生時代の思い出　私は看護医療学部の出身です。1､2 年生の時は､吹奏楽サークルに所属し、ディズニーランドやディズニーシーでの演奏に向けて、一生懸命楽器の練習をしていました。飲み会も大いに楽しみました！

髙橋　彩華
TAKAHASHI SAYAKA

看護医療学部助教（有期）

speciality

母性看護学・助産学

水井　翠
MIZUI MIDORI

看護医療学部助教（有期）

speciality

在宅看護学 / 緩和ケア

趣味　洋裁が好きで、子どもの洋服を作っていました！

学生時代の思い出　修論と格闘した大学院生時代、同期と一緒に夜遅くまで研究室にこもり、一緒に銭湯に行ったりしたのは、今ではいい思い出です。

村上　好恵
MURAKAMI YOSHIE

看護医療学部教授

speciality

臨床看護学（急性期看護、がん看護、遺伝看護）/ サイコオンコロジー

趣味　Walking。地図を見るのが好きなので、ウロウロしています。

学生時代の思い出　弘前大学出身ですので、弘前城の桜を４年間堪能しました。北海道出身の私には、白樺の樹の方が身近な存在のため、弘前城の桜は圧巻でした。朝から場所取り、夜桜の冷え対策に上衣の下に新聞紙を巻いて防寒し、最後はそれで掃除して帰宅の連日でした。

若林　那於
WAKABAYASHI NAO

看護医療学部助教（有期）

speciality

国際保健分野

趣味　フィールドワークです。国外問わず常に初めての場所、カルチャー、食事、芸術を求めてます。

学生時代の思い出　長谷部研究会、小林研究会、アフリカ医療研究会でコンゴ民主共和国に行ったこと。アフリカンパワーに毎日驚かされ魅了されました。お世話になったキンボンドの人たちは優しくて温かくて大好きな場所の一つです。

稲見　崇孝
INAMI TAKAYUKI

体育研究所准教授
健康マネジメント研究科委員

speciality

スポーツ科学 / 運動生理学 / 応用健康科学 / バイオメカニクス

趣味　最近は息子との釣りにハマっています。

学生時代の思い出　サッカーに精を出す毎日でしたが、ケガをして以降は選手をサポートする道に。勉強を後回しにしていたので計画は大切だと感じた思い出がいっぱいです。社会人４年目から働きながら大学院に進学し、再び学生に。Never too late。

取材記七夕祭

2024.7.6〜7.7

毎年7月頃にSFCで開催される学園祭。今年で35年目。大学のイベントでありながら地域のお祭りという面もあり、近隣の方々も多く訪れる。

▲学生による出店で、夢中になって遊んでいた子どもたち。

夢短冊企画

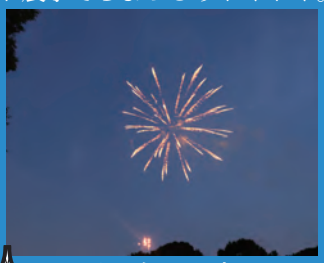
▲夢を書いて吊るす夢短冊。大量の短冊が風にはためいている光景は圧巻。

SFC芸術祭

▲▼模擬店、ステージ企画など、学生と来場者の交流が盛んに行われた。

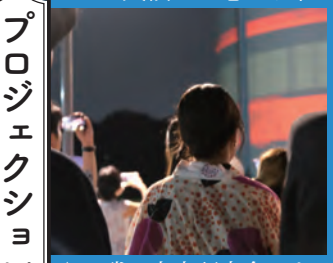
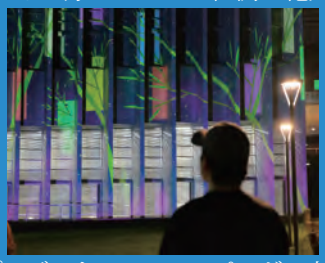
▲ VR を使った体験型のアート展示でちょっぴりドキドキ。

打ち上げ花火



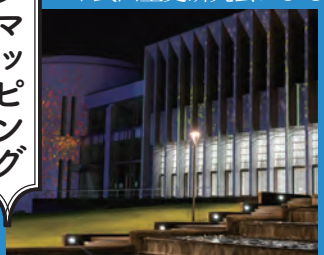
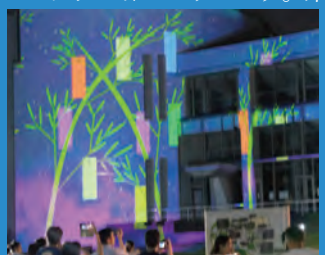
▲天候にも恵まれ、およそ 5 分にわたって恒例の花火が打ち上げられた。大迫力！

プロジェクションマッピング

▼閉幕。今年も楽しかった！

▲▼武田圭史研究会によるプロジェクションマッピング。来場者からは歓声が上がった。

未来構想キャンプ

2024.7.31~8.1

全国の高校1年生、2年生が集まって、SFCの教員・学生と一緒に課題に挑戦する未来構想キャンプ。今年はSFCと鶴岡タウンキャンパス、鳥取市役所の三カ所が会場となった。

WS01 起業・経営ワークショップ

▲▼発表に果敢に挑戦する高校生たち。

▲▼各テーブルで活発な議論が繰り広げられた。

自分たちで材料を選定して、設計して、加工して……。▲

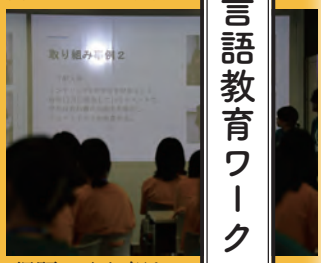
▲付箋でアイデアを整理。

▲学生と一緒に。

WS02 多言語教育ワークショップ

▲▼様々な言語に関心を持つ高校生たちが集結。

WS03 問いの探求ワークショップ

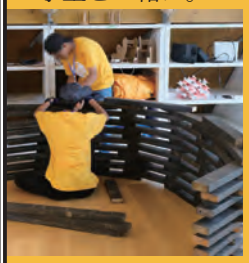


▲▼和やかだけど真剣に、課題に取り組む。

▲▼教員や学生とも対話を重ね、思考を深めていく。

▲ WS03 のテーマは「全ては問いから始まる」。

WS04 工作ワークショップ



フィナーレ

▲最後はシータ館に集合。各 WS ごとに成果発表を行った。

▲鶴岡会場

▲鳥取会場

編集後記

今号の特集テーマであるＳＦＣの海外研修は、コロナ禍の影響で約2年実施されていませんでしたが、2022年に復活してから、回を重ねるごとに盛り上がりを見せています。様々な分野の学生が参加して現地で数週間の生活を送る海外研修がカリキュラムに組み込まれていることは、まさにＳＦＣらしいと言ってよいでしょう。

本誌編集部には現在、私を含め、海外研修に参加したことのある学生が多く在籍しています。それぞれの経験を活かしてインタビューや記事執筆に臨むことができました。

現在も世界情勢の変化や円安の影響で、気軽に海外に行けない状況は続いていますが、本号が読者の皆様にとって、長期休みの過ごし方の参考になったり、外国語学習のモチベーションに繋がったりすることを願っています。

新連載の「新任教員プロフィール」では、今から1年前に発行された本誌第75号『THE BRAIN：湘南藤沢キャンパス教員プロフィール』のデザインを踏襲し、ＳＦＣに新たに着任された先生方をご紹介しました。

最後に、取材やご寄稿の依頼に応じてくださった皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

2024.11.12 編集長 藤田叶子

慶應SFC学会
発行人 黒田 裕樹（会長 / 環境情報学部 教授）
担当理事 宮代 康丈（総合政策学部 准教授）
事務局 田坂 真美

編集長 藤田 叶子（総合政策学部３年）
副編集長 堀江 真咲（総合政策学部２年）
吉松 野乃子（総合政策学部２年）
編集委員 東 史華（総合政策学部４年）
松本 こころ（総合政策学部３年）
荒井 美海（環境情報学部３年）
福原 衣織（総合政策学部２年）
井庭 晴香（環境情報学部２年）
藤井 美来（環境情報学部２年）
岡田 奈和実（総合政策学部１年）
多田 来希（環境情報学部１年）
野畑 六花（環境情報学部１年）

特集デザイン / 新任教員プロフィールデザイン
藤田 叶子（総合政策学部３年）
表紙・扉 / 挿絵 / 取材記デザイン
東 史華（総合政策学部４年）
新任教員プロフィールデザイン補佐
野畑 六花（環境情報学部１年）

発行日 2024 年 11 月 23 日
発行所 慶應SFC学会
〒 252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322
0466-49-3437
http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/
keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。

KEIO SFC REVIEW No. 78
ISSN 1343-3318
発行所 ／ 慶應SFC学会
http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/